博士論文要旨

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ Op. 106 の伝承・受容におけるロンドン原版の意義
―演奏史とエディション比較を踏まえた考察をもとに―
The Significance of the London Original Edition in the Performance Tradition and the Reception History of Beethoven's Piano Sonata, Op. 106.
In Consideration of the Performance History and the Comparison of Editions.

加畑 奈美 KABATA Nami

本研究は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig van Beethoven（1770～1827）作曲のピアノ・ソナタ Op. 106 のエディションの問題について論じるものである。これまであまり目を向けられることのなかった、作品の伝承・受容という側面からこの問題を考察することで、２種類存在する初版（以下、原版）のうち、ロンドン原版の意義を明らかにし、それをもとに新たな演奏解釈の在り方を提示することを目的としている。

Op. 106 は、自筆譜が消失している。原版はウィーンとロンドンの二つの都市で出版されたが、その双方の楽譜内容には相違点が多い。つまり、原版が２種類存在している状況だ。これに加え、ベートーヴェンがどちらの形も承認したという事実が明らかになっており、楽譜テクストをひとつに確定することが容易ではない。ウィーン原版は、同地に居たベートーヴェンが出版の直前まで目を通すことが可能であったと考えられることから、より作曲家に近い資料として最重要とされてきた。一方のロンドン原版は、弟子のリースがその出版に大いに携わったために、軽視されることが多かった。しかし、様々な年代の楽譜を見てみると、そこにはロンドン原版の表記も多く混在していることがわかり、ここに一つの矛盾があるように思われた。先行研究でも、ロンドン原版はベートーヴェン自身に由来するものではない、としてウィーン原版を尊重するもの（Gertsch 2001）がある一方で、両原版の相違が持つ意味についての再考を促すもの（Tyson 1962）や、Op. 106 を演奏したピアニストに着目し、ロンドン原版が演奏史においてはむしろ大きな影響力を持っていたことを指摘した上で、その内容を再考することの重要性を説くもの（沼口 2014）も存在している。更には近年、ロンドン原版に注目する原典版すら出版されるようになり、ロンドン原版の存在は、もはや無視できないものとなってきた。演奏家はロンドン原版を

どのように捉えれば良いのだろうか。本研究は、この疑問を出発点として多くのエディションを比較検討し、作品の伝承・受容に目を向けることで見えてくるロンドン原版の新たな意義を提示するものである。また、ロンドン原版を演奏解釈に盛り込むことが、第三者の恣意的な解釈を混ぜ込むということとは本質的に異なり、むしろ考慮されるべきであることを主張する。

本論の独自性は以下の３点である。一つ目は、作品の伝承・受容の側面から、エディションの問題を考察した点である。これまでの研究では「ロンドン原版は一次資料である」とされながらも、表面的にしか、その重要性を捉えてこなかった。しかし、多くの楽譜にはなぜ、二つの原版の混在が見られるのかという視点で、伝承・受容について調査・考察することにより、これまで明らかにされてこなかったロンドン原版の位置や重要性を明らかにした。本論第２章と第３章がこれに当たる。

二つ目は、幅広い年代の Op. 106 のエディションを対象とし、比較検討、及び二つの原版のそれぞれに由来すると考えられる要素の精査を行った点である。これにより、各エディションの特徴が明らかになると同時に、二つの原版がどのように扱われてきたのかの変遷をたどることにもつながった。さらにこの比較検討の結果を表にて添付したことで、どちらの原版を採用すべきかの判断に迷った際の指標になれば、と考えている。本論第３章がこれに当たる。

三つ目は、演奏者の視点で、ロンドン原版を視野に入れた新たな解釈を提示している点である。Op. 106 の最近の批判校訂版を含めたこれまでのエディションは、Op. 106 の楽譜出版において生じた二つの異本に対して、その違いを考慮しながらも、あくまで「一つの作品像の在り方」を構築すべきであるという立場をとってきた。さらに、その多くがウィーン原版を優位としながらも、そこにロンドン原版の要素の、いわゆる「良いとこ取り」をしてきたと言えよう。しかし本論の立場は、二つの異本の混在を推奨せず、ベートーヴェン自身によって確かに認められたこの二つの異本に対して、現存する数少ない一次資料を基に「どちらか一方のエディションの方が優位であるとは言えない」と捉える点でそれらとは大きく異なっている。これまでウィーン原版ばかりに偏った立場が当たり前のように存在していたことに疑問を呈すると同時に、ロンドン原版の形もまた、ベートーヴェンが認めた一つの有効な作品像であることを主張する。本論第４章がこれに当たる。

各章の概要は以下の通りである。

序章では、Op. 106 の基本情報をまとめた。作品が成立する少し前からのベートーヴェ

ンの伝記的事実をまとめることで、Op. 106 がどのような状況の中で作曲されたのかを概観した。また、本論第２章の「演奏史」の考察に関連する事項である「初演」について述べた。

第１章では、一次資料の精査を行った。Op. 106 のエディション問題は、特異な出版事情に加えて、一次資料のほとんどが消失しているという不運な状況が重なり、より複雑化している。よって本論では、現存するものを精査し、それを踏まえて消失したものの内容についても可能な限り推論した。一次資料に関しては、これまで様々な先行研究でもちろん扱われてきたが、時系列を追ってそれらをまとめて見ることのできる資料が無い上、先行研究は時に矛盾する内容を示していたため、今一度精査するに至った。書簡の精査からは、ベートーヴェンが弟子のリースに、ロンドンでの出版に関して全幅の信頼を置いていたことや、ロンドンにいるリースとのやりとりをスムーズに行えなかった様子、そしてそうした状況の中でもベートーヴェンがロンドン原版に自分の意向を強く反映させようと努めたことが明らかになった。訂正リストの精査からは、ロンドン原版がよりベートーヴェンの自筆譜に近い楽譜であった可能性と、ベートーヴェンの意向がより多く反映されているという意味でウィーン原版にも劣らないという重要な事実が明らかになった。これにより、訂正リストには言及のない、二つの原版の様々な相違箇所で、ロンドン原版を優先すべき可能性すら垣間見ることになった。さらに、訂正リストにおいて、ベートーヴェンがロンドン原版の楽章順で各楽章を呼ぶ箇所が存在していたことから、ロンドン原版の作品像も、ベートーヴェンが最後まで悩んだ一つのあり得る形であったことも明らかになった。

第２章は、Op. 106 の演奏史とエディションについて見ることで、ロンドン原版の存在が、作品の受容にどれほど影響を及ぼしていたのかを明示した。現代においては軽視されがちなロンドン原版だが、作品が世に広まり始める 19 世紀には特に、大きな影響力をもっていたことが明らかになった。この背景には、難曲である Op. 106 の演奏を可能にした人物がロンドン原版を手にしたことがあった。加えて、ベートーヴェンが提案したロンドン原版の作品像が、受容において功を奏したと言えるだろう。演奏批評から明らかになった、19 世紀当時の人々の Op. 106 に対する戸惑いを見ると、もし複雑なフーガが組み込まれた、長大かつ難解な作品像である「ウィーン原版」しか存在していなかったら、作品が受け入れられるまでにもっと時間がかかったかもしれない状況が垣間見えたのである。ロンドン原版の作品像があってこそ、Op. 106 は少しずつ受け入れられるようになったと言っても過言ではない。その後、作品が知れ渡るようになると、ウィーン原版の方が一般的

となったが、20 世紀に入ってからも、ロンドン原版を底本とする楽譜や、ロンドン原版の重要性を主張する立場は存在し続け、いまやその影響は現代の「原典版」にまで及ぶようになった。

第３章では、作品出版当時から現代に至るまでのエディションを対象に比較検討を行い、そこから明らかになる各エディションの校訂の特徴と系譜を整理した。これにより、Op. 106 の伝承・受容において、二つの原版がどのように扱われてきたのかの変遷をたどることが出来た。比較検討の結果、想像以上に多くのエディションの中でロンドン原版の要素を見ることになった。これまで先行研究や作品目録では、ウィーン原版ばかりを重要視し、ロンドン原版は非難すらされてきたが、受容の実態はそれとは異なり、ロンドン原版は不可欠なものとして様々な楽譜の中に存在していたことが明らかになった。また、ウィーン原版こそが最重要であると考えられるようになった転換点に「旧全集」の存在があることもわかった。

第４章では以上のことを踏まえた上で、二つの原版を等しく重要であると見なし、その相違に見るそれぞれの解釈の可能性を考察した。また、ロンドン原版の特徴をまとめることで、ロンドン原版にしかない様々な表記の中に、ベートーヴェン由来の、決して無視することのできない要素があることが改めて明らかになった。

第５章では、結論を述べた。本論によって明らかになった点は以下の通りである。第一に、ロンドン原版のオーセンティシティである。ロンドン原版は、ベートーヴェン自身の意向を大いに反映したもので、最も重要な資料のひとつである。第二に、従来使用されてきたエディション、それも特に演奏で頻用されている楽譜に、二つの原版の要素が混在していたという事実である。このことから、ロンドン原版の影響力の大きさが垣間見えた一方で、二つの原版の要素が断りもなく混在していたという問題視すべき点が浮き彫りになった。第三に、ロンドン原版は作品の伝承・受容にとって、とても重要な位置にあり、むしろ不可欠な存在として受け継がれてきたという事実である。そしてこれこそが、ロンドン原版が本論において新たに獲得する意義である。

これら３点を踏まえると、演奏解釈にロンドン原版の要素を取り込むことは、第三者の恣意的な解釈を混ぜ込むということとは本質的に異なり、積極的に考慮されるべき事柄であることが明らかになる。しかしこれまでの多くのエディションのように、二つの原版を無自覚に混ぜてしまうことが、正しい姿勢であるとは言えない。ピアニストたちもまた、この二つの原版を精査し、正しく理解した上で、解釈を構築すべきだろう。つまり、Op. 106

のエディションの問題は、ピアニストが主体的に関わるべき問題であり、それを熟考して初めて Op. 106 を解釈し、演奏することができると言えよう。